

# 地域情報で出会いを創造

淀川右岸の大阪市淀川区では毎月下旬、カラー刷り40ページに地域情報がぎっしり詰まったタウン誌「ザ・淀川」が全世帯に届く。81年5月にタブロイド判で創刊され、今や約9万部を発行する月刊フリーペーパーだ。名物編集長・故南野佳代子さん（09年逝去）の後を継

## なにわ人模様

タウン誌「ザ・淀川」2代目編集長 乃美夏絵さん(30)＝大阪市北区



### こだわりの紙面作り健在

ぎ、2代目の乃美夏絵さん(30)は日々、街の話題を求めて自転車で走り回っている。対岸の北区に住む乃美さんと「ザ・淀川」の出会いは05年。自宅に姉妹

誌「ザ・おおさか」(09年3月号で休刊)が届き、身近な街の人や場所が生き生きと描かれる内容にひかれ、編集部に飛び込みで電話を入れた。当時、スタッフは募集していな

んから「次の編集長やってくれる？」と言われるまでになった。

しかし、「交代」は思ってもよらないほど早く訪れた。09年9月15日、長いがんとこの闘病の末、南野さんが64歳で逝去。「廃刊は誰も考えなかった」が、大黒柱の早すぎる死に経営難も重なり、心細さは否めなかった。そんな時、乃美さんを励ましたのは、読者でもありスポンサーでもある地元の

人たちがだった。

「絶対になくしたらいかん。(ザ・淀川は)絶対に必要なんや」「地域のニュースは大事やぞ」。地元の声に後押しされ、収入減は1号だけの休刊で乗り切った。ページ数も減らしたが、中学生のスポーツ大会や喫茶店でのコンサートから、介護特集や原発事故で被害を受けた福島県の酪農家の講演まで、「地域情報を大切にしつつ、世界を視野に入れる」こだわりの紙面作りは健在だ。

現在、編集スタッフは乃美さん含め女性5人。難民について考えるトークカフェや上映会を開いたり、紙面を飛び出す企画も続々と考案中だ。乃美さんは「情報は人と人と街をつなげるもの。そんな出会いをどんどん生み出していきたい」と目を輝かせていた。

【近藤希実】